西宮市子ども・子育て会議

第14回　評価検討ワーキンググループ

会　　議　　録

■日　時：令和２年（2020年）２月13日(木)

■場　所：西宮市役所６階　681会議室

会議次第

議事
（１）子ども・子育て支援プランの評価について

会議概要

議事（１）子ども・子育て支援プランの評価について
①重点施策４（妊娠期から乳幼児期の子育てへの支援）

○委員　保健所と子育てコンシェルジュの連携については、資料集17ページの「(１)妊娠期から子育て期の切れ目ない支援の充実」の子育て世代包括支援センターとして両方がどれだけ連携できるかだと思う。連絡会ではなく、最初の入口のところからワンストップになるように、例えば健診に行けばいつでも利用サービスについて相談できるコンシェルジュと発達などが相談できる保健師の方が両方いるのが本来のあるべき形だと思う。乳幼児健診時に子育てコンシェルジュが行っても個人情報の壁があり、連携がなかなかうまくいっていないことを現場から聞いている。しかし、もともとこの制度は個人情報の壁に阻まれてはいけないものであるし、もしそれがあるのならそれをどう解決するかについて少し工夫が必要だと思う。乳幼児期だけでなく、妊娠期から、サービスを教えてくれるコンシェルジュの制度と保健の健診制度を併せて機能をうまく利用することをもう一度お願いしたい。自己評価では、切れ目のない支援を行っていくという努力目標だけではなく、さらに具体的に申し上げたようなことをお願いしたい。
●事務局　健診時における子育てコンシェルジュと保健師の連携については、個人情報の壁等による課題があると認識している。ただ直接情報自体を伝えることはなかなか難しいと思うが、密な信頼関係、顔の見える関係づくりを進めていく中で、連携は一定できていくと思う。今のところ、民間の子育てコンシェルジュが健診の場所で子育て総合センターと地域保健課が行っているような連携は難しいと思うが、別の形で連携を模索していくことをこちらとしても考えていきたいと思っており、顔の見える関係づくりから信頼関係を積み重ねていくこと以外にはないと思っている。
○委員　個人情報の手渡しをしなくても、健診している場所に机を１つ置いて、「西宮市の子育て世代包括支援センターの役割として健診にはコンシェルジュも来ているので、相談がある方はどうぞ」と示すことはできると思うので、そのような工夫で共同することを検討して欲しい。相談に来る方から個人情報をもらうことはご自身の意思であるため工夫ができるのではないか。もっと言えば、保健師との面談時の説明として、「しんどいところを乗り切るためにこういうシステムになっていますので、ここでの相談は利用者の方の了解を得て子育てコンシェルジュにも情

報提供させていただきますが、いいですか」と確認する等、工夫をすればできる方法があるのではないか。
●事務局　それについては、持ち帰り具体的なところでできることについては検討したい。
○委員　18ページの具体的な取組みの２番目にある「健やか赤ちゃん訪問事業」について、民生委員が各家庭を訪れて、「ここのご家庭はハイリスクだ」と感じたときに市としてどのように対応する流れとなっているのか。
●事務局　民生委員が訪問する中で気になる家庭については、子供家庭支援課に連絡をいただいている。同時に、保健師にも連絡を入れ、気になる家庭については、保健師からのアプローチ、場合によっては子供家庭支援課からのアプローチをして、その世帯状況の把握に努めている。
○委員　それが重点施策６や７に関わるようであれば子供家庭支援課になると思うが、そのような場合は、市の中では保健所が一元的に情報を持っている形になっているのか。
●事務局　個別健診などで把握した気になる方については、地区担当保健師が全部集約しているが、要保護児童対策協議会にあがるケースについては、子供家庭支援課と共有して対応している。
○委員　それでは、以後は地区担当保健師の動きになってくるのか。
●事務局　母子保健の関係であれば地区担当保健師で対応し、それ以外の子育ての色々な悩みや困り事などについては、各々の関係部署につないで支援していくようにしている。
○委員　民生委員が健やか赤ちゃん訪問でどのような聞き取りや情報提供をするかについては研修を行っているが、継続して研修は行っているのか。
●事務局　今年度、民生委員の一斉改選があったため、新たに民生委員に就任した方については、訪問方法等について知らせている。
●事務局　「健やか赤ちゃん訪問事業の手引き」を作成し、Ｑ＆Ａや制度の概要を掲載し民生委員の意識を高め、的確な支援につなげている。
○委員　男性の民生委員の中には、全く子育てが分からない人もおられる。定年退職して地域に何か恩返しをしようと思っても、私たちの年代では全く子育てをしなかった方が多いので、「健やか赤ちゃん訪問事業の手引き」に基づいた訪問を行っていても、対応する保護者からすれば「この人に言って何が分かるのか」という感じが実際にあると聞く。男性民生委員に対する拒否反応とまではいかないが、気軽に相談できないという雰囲気を緩和するために、女性の民生委員と同伴する、代わって主任児童委員が行くなどの工夫を徹底してやって欲しい。せっかくの１回しかない機会がそうした形で終わってしまうともったいない。
○委員　前回の会議で「訪問する男性の民生委員はどう思っているか」と聞くと、「嫌がっている」と言っていた。そのあたりは少し改善したほうがよい。
●事務局　今、民生委員が欠員になっている地区もあり、民生委員に就任していただける方は非常にありがたい貴重な存在であり、男性だからといって訪問させない

ことはできない。エリアによっては「男性の方はちょっと」という話が直接入れば、女性の民生委員あるいは主任児童委員と一緒に行くという工夫をされているところもある。徹底されていないところもあるが、民生委員の理事会などと話をして、ご報告できるところがあればさせていただく。
○委員　西宮市は民生委員を利用してこの事業を行っているが、必ずしも民生委員でないといけない事業ではないため、もう少し成果が現れるような仕組みを考えていただきたい。

②利用者支援事業に関する意見交換会（まとめ）

●10月21日に開催した「利用者支援事業に関する意見交換会」について事務局から説明。
○委員　地域の子育て支援者は、子育てコンシェルジュのやっていることに反対ではなく、同じ想いで西宮の子育て支援が良くなっていけばと思っているため、「地域との連携」が、年に１回の会議だけで連携と言えるのかという話になってしまう。子育てコンシェルジュも、日々、保護者の相談に応じていると思うが、地域の子育て支援者も保護者から聞く悩みや相談の中での気付きを拾い上げて、子育てコンシェルジュを通じて関係機関につなげて欲しいと思っている。子育てコンシェルジュが細かいことを見るのではなく、地域の子育て支援者との連携の中で全体を把握するというつながりができなければならない。
　そうした中で２月８日に行われた「子ども未来カフェ」はすごくよかった。
　子ども未来カフェでは、地域の子育て支援者や保護者など色々な方が来られ、私たちもフェイスブックなどを見ていたり、知り合いの知り合いだったり、名前は知っていても普段関わりのない方が多く、お互いが「知っていましたよ」という感じで名刺交換をしていた。そういう人たちと実際につながれたことはすごく大きい。
　今回の意見交換会では、子育てコンシェルジュと話をすることで、それぞれの立ち位置が違うことも知ることができた。これを通じて次のステップとしてまたこういう会が開かれたらと思う。
○委員　やはり話をすることが大事である。話し合う場が多くあればあるほど、困っている人も声を出しやすくなると思う。子育てコンシェルジュの月に１回の会議でも、子育てコンシェルジュ同士が自分の困り事を出し合っておりすごく意味がある。子育てコンシェルジュが全てを行うことは難しいため、様々な場所で支援を行う地域の子育て支援者がそれぞれにできることをしながら、「こういうことをやっている」という情報共有をしていくとどんどん変わっていく。

③重点施策５（子育ての不安・負担の軽減）

○委員　最近の子育て世帯は、祖父母世代からの情報を当てにせず、インターネット上の情報に頼っている。産後すぐには動けない状況の中で、ファミリー・サポート・センターの就学前児童の利用人数は、平成29年から30年にかけて減っている。そういうサービスがあっても届いていない状況が原因の一つにもなっているのではないかと思う。
計画の中には入っていないが、どうやって情報を届けるかが重要で、今はＳＮＳを通して情報をとっていることから、それをもっと活用する工夫が必要である。きちんと学んで適切に運用すれば、これも武器になる。
　例えば、土曜開放日等があった時に、「このように皆さん遊びに来てくださっています」とツイッターでつぶやいたら、随分フォロワーが増えている。しかし、それは下手だと若い人に言われた。なぜかというと、例えば「子育て」や「しんどい」などのハッシュタグを付けていないから。
　要は、取組みの目標云々の話ではなく、若い人たち、今困っている人のニーズを把握し、必要なサービスを届ける工夫をもっとしていく必要がある。
○座長　発信の仕方も含めて。
○委員　「子育てひろばの拡充」として、空白地域１か所の整備を進めるとあるが、空白地域はどこだと認識されているのか。
　もう一つが、「子育てのネットワーク化」として、子育てサークルなどと連携を広げるために、この間の「子ども未来カフェ」では地域の子育て支援者同士のつながりができたと思う。実施内容にある地域子育て支援拠点事業協議会では子育てコンシェルジュと子育てひろばがつながっていると思うが、地域の子育て支援者とのつながりについては、どこまでを範囲として捉えているのか。地域で活動されている方の中には、子育て総合センターに登録している子育てサークル、登録していない子育てサークル、NPO法人などの枠組みで活用されている方、店舗の中で子育て支援に近いようなことをしている方など様々である。
色々なところを訪問されているのは知っているが、行政が把握している方だけが子育て支援を行っているわけではなく、そうした方たちが集まれる場が今後は必要であり、そのような場ができれば、各地域の子育てひろばで集約し子育てコンシェルジュにつながっていく仕組みができるのではないか。来年度以降、どのようにつなげていこうと思っているのかを聞きたい。
●事務局　１つ目の空白地域については、北口周辺として瓦林や瓦木地域、小松地域、南甲子園、西宮浜などがあり、それぞれの地域における利用者の実態や年齢層なども踏まえて検討したいと考えている。
　２つ目については、子育てコンシェルジュが訪問している、子育てひろば、子育て地域サロン、登録している子育てサークルがメインになる。昨年度から地区担当制として子育てコンシェルジュが各地区を訪問しており、今年度は子育てコンシェ

ルジュも自分の役割をより強く認識して訪問していると感じている。その中で、昨年から培ってきている関係性をより深めていきたいと思っている。そのため来年度すぐに訪問する団体をやみくもに増やしていくのではなく、今訪問しているところをさらに深めて、支援者同士のつながりがより深くできるように、まずはその地域の子育てひろば同士の支援者をつなげていけるように、子育てコンシェルジュが足しげく通って、少なくとも地域の中では代表的な支援者が顔の見える関係になることが大事だと考えている。あるとき一つの子育てひろばに集まって色々なことをされたり、違う月には違う子育てひろばに集まるというような形で、それぞれの拠点で順繰りに催しができたり、話合いのような場が広がっていけばと考えている。直ちにその形にはならないかもしれないが、今はそのための地盤づくりができていると思っている。

○委員　子育てコンシェルジュが訪問し、サークルやそれぞれの利用者を見て、こういう方がいると知っていただくことはよいが、支援者同士が集まって、今後やりたいことや地域の子育て支援がこうなればいいと話す場があるとよい。ぜひ来年度は、その集まる場づくりをしていただきたい。子育てコンシェルジュの体は一つしかないので、色々なところに行くのは限界があるため、地域の子育て支援者が集まればよい、ぜひ集めることを進めて欲しい。

○委員　子育てひろばがあちこちの地域にあり、参加されている人数も軒並みいい数字で推移している。ただ、市が子育てひろばで行いたいと思っている趣旨や具体的活動内容をもう一度確認したい。

●事務局　子育てひろばの役割としては、子育ての不安や負担の軽減が一番大きなところであるが、保護者が一人で悩まず、まずは外に出て誰かとつながり、何げない話やささいなこと、ちょっとしたことでもそこにいるスタッフなどに話せることが大きい。また、同じような立場の保護者がそこに集うことによって、仲間づくりができ、同じ立場の者同士が話すだけでも負担の軽減になっていることが大きいと感じる。実際に具体的な何かができなくても、話をすることができ、同じように大変な思いをしている保護者が頑張っていると思うことを共有できただけで、「元気をもらいました」とか「楽になりました」という実際の声が寄せられる。そういうところを大事にして事業を進めている。

○委員　子育てひろばは、とても大切な共有空間だと思う。子育てひろばや子育て地域サロンなどに呼ばれて色々なことをさせていただく中で、これだけの人数が集っているのは、やはり保護者がそれだけ求めているのだと思う。これだけ保護者が集まるため、やり方次第ではもっと有効になるのではないか。例えば、そこに立ち会って指導している民生委員や社協の方を見ると、遊具を出したりして空間づくりはされているが、保護者同士が勝手に話をしている、話せないひとりぼっちの保護者がいるなど放置している。積極性のある人はどんどん友達をつくれるが、積極性のない方は、ここで何かしたいと思って来ていても、その勇気がなくてひとりぼっちになっている人も見受ける。話すことはすごく大切で、話すだけで解消できると思う。先日、教育委員会を通して共同で講演会を開催したが、後半はグループワー

キングで話し合う場をつくると、そちらのほうが盛り上がった。アンケートを見ると、「話し合えてスゴクよかった」という意見が出たので、話すことは重要だと思った。子育てひろばにはせっかくこれだけ人数が集まるのだから、これをもっと有効活用すると今言っている色々なものが解消されるのではないかと感じた。

④重点施策８（ワーク・ライフ・バランスの推進）

○委員　ワーク・ライフ・バランスの取組み内容について説明があったが、ほとんどを知らなかった。また父子手帳も開けて見たことがなかった。子育て世代の父親は見ているのかもしれないが、それを見たという話も身近で聞かない、これだけ実施していることがどうすれば実を結ぶのかなと思う。「父母ともに子育てをしている家庭の割合」が３ポイント下がっているのを見ても、父親は物理的に帰ってこないという諦めの境地がある。

例えば「労政にしのみや」や市政ニュースに企業が表彰されました、「お父さん、育児していますか」などと書いたところで、実際に父親が帰れないのは帰れないのだからしようがないと思う。母親は帰ってきてくれたら、その時間にいてくれたら、その間に違うことができたり、ごはんがつくれたりして助かるとは思うが、いないからイライラするし、たまにいて何かをするとまたイライラする。それは社会全体の問題かもしれないが、どうすれば父親が早く家に帰ってこられるのか。多分「パパトーク」などに来られる方は意識のある方だと思うが、一般的な父親は、きっとそういうことをしていること自体を知らないと思うし、そういう意識もないと思う。

○委員　子育て総合センターに「意識高い系お父さん」が来ている可能性はあるかもしれない。うちの子が昨年まで通っていた幼稚園では、「かたぐるまの会」という父親の会がある。その会には結構な数の父親が参加し、餅つきの手伝いや幼稚園の行事の手伝いを通して、パパ友の輪ができ、家族ぐるみでキャンプに行ったりしている。そのようなことが、あちらこちらにできたらいいのではないか。

この「パパＤＡＹ」にしても、ここに来た人たちが後もつながるような友達になったりしたらいいなと思うと、例えば子育てひろばや小学校区単位で父親が参加しやすいようにしてはどうか。「かたぐるまの会」はうまくいっている一つの例だが、いろいろな保育所や幼稚園であってもよい。

○委員　パパの会をつくっている園も増えてきている。行事で父親に手伝ってもらうようなことをうちの園でもやっているが、今年初めて「母子家庭なので、父親だけが集まる会を園としてやってほしくない」という意見が出てきた。そういうやりかけたところで抑えなければならなくなったという現実もあり難しい。保育所は母子家庭が多いので、そういう問題も考えなければいけない。

○委員　ワーク・ライフ・バランスで父の育児参加を増やそうとするときに、この施策自体が合っているのかどうかの検証が必要ではないか。「宮っ子の育て方」と

いう父子手帳をもらったからといって気持ちが変わるかと言われるとなかなか難しいところがあったりするため、父が見て本当に「頑張ろう」となるのか、１万部をどう配布して、その効果はどうだったのか、子育てひろばや地域の中でどう広げていくか、父もしくは家族共同での育児をどのように進めていくのかという視点で、もう一度この施策を見直していかないと難しいのではないか。

行政でできる範囲はこれだけなら仕方ないが、もう少し違った方向性を実際に考えていかないと、掲げている目標が大き過ぎるが余りに、なかなか難しくなってきていると思う。昨年度も微妙な雰囲気でこの評価が終わったような記憶があるので、この機にどこかで見直しできたらよい。

○委員　子育てひろばでは父子家庭の方も来られていて、色々なお母さんから色々なことを教えてもらっており、それがそのお父さんの支えになっていたようだ。

若い夫婦を見ていると、参加意識はすごくあると感じる。そういう方が来られる場所としては、やはり保育所や幼稚園が一番多いと思う。市だけでは非常に難しくて、市が打ち出してもそれを受け止める方が必要である。うちの園には次年度も父子家庭の方が来られるため、母親だけではなく、みんなで子育てという雰囲気もつくっていかないといけないと思っている。昨日から３日間行事をしているが、父親が結構来ており、意識はあるためこちらも発信しながら、市との連携のもと、そこを上手に進めていければよいと思う。

○委員　改めて父子手帳を見ると、最近の若い母親の視点から見てアウトだと思う。どこを見ても、母親が主たる養育者で、父親が手伝うというスタンスになっている。今の母親のいら立ちの一番は、父親が主たる養育者の１人だ、２人の子供だから２人で育てるという覚悟がないこと。しかし、現実はそういかないのは分かっている。男性の仕事の環境なども分かっているが、既に若い人たちは「一緒に育てる」と思っているし、ほとんどの母親は父親にそれを求めている。だから、そもそも「父子手帳」という名前がいいのかどうかは分からないが、男の人たちが実際に親としてどう成長していくか、それをどう担っていくかという共同養育の視点でつくらないといけない。

それと、例えば「ワーク・ライフ・バランスの推進」のところで、主たる養育者であるから男性の育休取得が推奨されているが、取った後の自分のキャリアに対する不安や、その時間を一人で子供を育てるときの不安、社会から隔離されることに対する心配や悩みがあることの前提でこういう手帳をつくらなければいけなくて、それに対するサポートをどうするなど、アドバイスが載っているような冊子が今や必要なのではないか。これは10年以上前だったらよかったかもしれないが、今の母親はこれを求めていない。一緒に育てる男性を求めているし、「あなたは親の一人で、産むことと母乳をやることだけは私しかできないが、あとのことは全部あなたができるのよ」という考え方でいるため、これはアウトではないかと思う。

夫婦間の子育ての悩みの中で、パートナーが自分の子育てのしんどさを分かってくれないことが大きい。そこを理解してどういうサポートをすればいいかについて、お手伝いとしての役割ではなく、母親にありがとうでもなく、できない場合にどう

気持ちをサポートするかについてもう一度見直していただきたい。

ワーク・ライフ・バランスを推進することは大き過ぎてなかなか難しいかもしれないが、家庭の中で子育てをシェアする、きちんと独立している２人が養育者として物理的に無理でも精神的にシェアする、そこがきちんとできれば、次に自ら働き方と家庭での責任のバランスを考えていく夫婦関係ができるのではないかと思う。

○委員　うちのサークルでも、以前は父親の転勤先についていく人ばかりであったが、このところ、今は育休だからついてきたが、育休が明けたら仕事に復帰するために帰るという母親も増えてきた。それが多数派ではないと思うが、転勤族というと母親は働かないというイメージが、働く転勤族の妻もすごく増えており、妻側にも転勤や色々な働き方があることをここ２～３年すごく感じている。サークルの中でも、「私は転勤族の妻だけではない」という自分をつくろうとしているところもある。そういうことを考えると、私から見ていても、20代後半ぐらいから一気に考え方が変わっていて、10年前だったらこんなことを言わなかったのにという母親が本当に増え、父親も結構意識が変わってきて、阪急西宮ガーデンズを見ても、平日に子供を抱っこひもで連れている父親が増えている。父子手帳をみても、今の父親が分かっている、知っていることが結構多くて、ワーク・ライフ・バランスで言うと、子育ての視点のことよりも、お互いが人生をしっかり歩めて子育てを一緒にやっていくという２人向けの冊子でないとだめなのではないかと思う。母親には「今子育てを始めたけれども、子育てだけで終わる人生ではないよ」と言ってあげないといけないし、父親に対しても、「仕事だけではなくて、子育てもしないと人生の一つにならないよ」と言ってあげる、そういう啓発冊子を作成するかワークショップをするかなどしていかなければならない。

●評価検討ワーキンググループでの評価結果については、次年度に開催される子ども・子育て会議で報告することを確認し閉会。

〔午後３時10分　閉会〕

【委員出席者名簿　9名】

所属団体・役職名等	氏　　名
関西学院大学教育学部 教授	橋本 祐子
西宮労働者福祉協議会 特別理事	久城 直美
公募委員	久保　　香
西宮市青少年愛護協議会 苦楽園地区青少年愛護協議会 会長	佐藤 美由紀
神戸ＹＭＣＡ	谷川　　尚
西宮市私立幼稚園連合会 理事長	田村 三佳子
社会福祉法人ほっとスマイル 理事	東野 弘美
西宮市私立保育協会 会長	藤原 和子
転勤族ママ＆キッズ探検隊 in 西宮 代表	松村 真弓

【事務局出席者名簿　10名】

所属・役職	氏　　名
子供支援総括室長	大神 順一
子供支援総括室参事(計画推進担当)	安福 聡子
子育て支援部長	小島　　徹
子供家庭支援課長	岡田 良一
子育て事業部長)	伊藤　　隆
保育幼稚園支援課長	松井 亮一
保育入所課長	秋山 一枝
こども未来部長	足立　　敏
子育て総合センター所長	海部　　康
地域保健課長	塚本 聡子